

本日の学び テーマ:「最も小さい者の一人に」 テキスト:マタイ25章31節-46節

【理解の手がかりとして】

マタイ 25 章 31 節以下には、再臨のキリストが何をなさるのが記されている。「羊」と「山羊」という二種類の動物がたとえとして用いられ、キリストに従順に生きた者とそうでなかった者とをえり分けられる、と書いてある。

さらに 35 節以下から 46 節までは、その従順さ、信仰の質が問われる問題が、二種類の人々をたとえとして記されている。この二種類の人々はとても対照的である。はじめの人たちは、自分の身の周りにいる「小さい者」(飢えている人、喉が渇いている人、旅をしている人、裸の人、病気の人、牢にいたる人)に対して、日頃から親切に扱い、善き隣人となった人達であった。一方、あとの人たちは、反対にそうしなかった人たちである。その結果として、再臨のキリストは、はじめの人たちを大きく祝福し、神の国を受け継ぐ権利、祝福を与える。一方、あとの人たちには、永遠の刑罰をお与えになる。

とても厳しく、そして普段の私たちの信仰生活に対して「ハッ」とさせられる話である。私はこの箇所を読みながら、一つの物語を思い出していた。それはクリスマスの「東の国の学者たち」(メルキオール、バルタザール、カスパール)に続く、四人目の学者(アルタバン)の話(聖書には記述のない伝説)である。

*

アルタバンは、王なるイエス様への贈り物として三つの輝く宝石を持ってきた。彼は四人の中で一番若く、そして彼ほど真の王の誕生を待ち焦がれた人はいなかった。しかしベツレヘムに向かう旅の途中、彼は、小さな子どもがすすり泣く声を聞いた。その子どもは埃にまみれ、裸で、たくさんの傷を負っていて出血し、自分ではどうすることもできずに横たわっていた。

彼は、この子どもが今まで見たこともないほど可哀そうに思い、憐れみ、抱きかかえて、今出て来ればかりの村に帰って行った。彼は、この子どもを世話してくれる女性がいなかったかと探し、その女性に子どもと共に高価な宝石の一つ預けた。それで、この子どもの命は救われた。

彼がまた旅を続けていると、星が彼に道を示した。その星を目指して行くと、彼はある町に到着した。するとそこでは一つの葬列が彼の方に向かってやってきた。その家族の父親が亡くなったので、母親と子どもは奴隷として売られて行くしかないことを知った彼は、この二人に二つ目の宝石を与えた。

さらに進んでいくと、彼はもう星を見つけることが出来なくなった。彼は、自分が使命に忠実でなかったのではないかと思い、心が苦しくなる。すると突然、星が輝き、彼を見知らぬ国へと導いた。その国では王が怒り狂い、兵士たちはある村の男性らを集めて、殺そうとしていた。彼は、三番目の宝石でその男性らを買取り、自由にした。すると、またもや星が見えなくなってしまった。

三つの宝石が亡くなって彼は貧しくなった。…が、なお彼は国々を旅し、困っている人々を助けた。ある港では、父親が家族から引き離されて、借金の代わりに奴隷船に売られようとしていた。彼は、この父親の代わりに自ら志願し、長い年月、船の奴隷(漕ぎ手)として働こうとした。

その時、星が彼の心に輝いた。彼の内面に輝くこの星の光が彼の内に満ちあふれ、「これが正しい道なのだ」という静かな確信を得た。他の奴隷たちや船の主人も、この人の不思議な光を感じた。それで彼は解放されたのである。

夢の中で彼は再び星と出会い、一つの声を聞いた。「急いで、急いで！」。…真夜中に彼は起き上がった。すると星が輝き、彼を大きな町の門のところまで導いた。たくさんの人と共に、三つの十字架が立つ丘のところまでやってきた。するとその真ん中の十字架の上で星が輝いていた。

そこで彼は、その十字架にかけられている男イエスと目が合った。それは、この世界のすべての苦しみを感じているかのようなまなざしであった。しかし、その目は優しさと無限の愛で満ちていた。釘が打ちつけられた彼の手は、痛そうに内側に曲がっていた。

すると突然、この苦痛に満ちた手から光が瞬いた。その瞬間、彼は全身を震わせ、「この方こそ、わたしが人生をかけて魂の底から探し求めてきた方だ」「この方こそ、人類の王、世界の救い主」と気づいたのである。そして、彼がそれまでに会った、あらゆる苦しみの中にいた人々、重荷を背負っていた人々の中に、そのキリストがおられたのだ、ということに気づいたのであった。

彼は、十字架のもとに跪いた。すると、彼の手に血が三滴したたり落ちてきた。それは三つの宝石よりも輝いていた。十字架の主が叫んで亡くなった時、彼も一緒に命を終えた。しかし、彼の顔は死んでもなお主の方に向けられており、その顔は星の光を受けて輝いているようだった。

＊

私はこの物語を読む度に感動する(キリスト教文学の豊かな精神性がここにある)。私は子どもの頃、何度かその四番目の学者の役を演じた。教会のクリスマス劇でのこと。そして子ども心に、信仰とは何か、キリスト者の生き方とは何か、ということに気づかされたように思う。幼い頃から「自分が接するすべての人をキリストと思いなさい」と教えられてきた。それは、今日の御言葉を凝縮した教えだと思う。

正直、これはとても難しい高尚な教えである。実践するのは簡単ではない。しかし、そこであきらめず、少しずつでも実践できる者になって行きたい、と思う。願わくは、意識せずとも、知らず知らずにそう出来るようなキリスト者になれたらと思う。一日いちにちが「世の終わり～キリストの再臨の日」であっても良いように、全ての人に対してキリストに出会うがごとく生きていけたらと願う。

【聖書教育より】

『くつやのマルチン』…イエスさまを待っている間に、寒さに震えているおじさんや凍えそうなお母さんと赤ちゃん、そして小さな男の子と出会い、助けました。…さて、イエスさまは誰だったのでしょうか。」
(子どもクラス)